

パールシー・サンスクリット語詩  
『十六のシュローカ』の試訳

永井悠斗

本稿は、インドにおけるゾロアスター教徒、即ちパールシーに伝承されるサンスクリット語詩『十六のシュローカ』(Skr. *Ṣoḍaśa-Śloka*) の試訳および解説である。以下では、まず『十六のシュローカ』の和訳をサンスクリット語テキストに続く形で掲げ、その後に『十六のシュローカ』の写本および校訂状況について、そして著者および成立年代を巡る議論について簡単な解説を行う。

1. テキストおよび翻訳

『十六のシュローカ』の主な校訂テキストとしては、E. S. D. Bharucha の *Collected Sanskrit Writings of the Parsis Part VI* (1933) 所収のテキストと、H. P. Schmidt の“The Sixteen Sanskrit Ślokas of Ākā Adhyāru” (1963) 所収のテキストの二つが存在する。

翻訳にあたり、本稿は後者の Schmidt のテキストを底本とした。但し、Schmidt のテキストで用いられている、閉鎖音の前に現れるアヌスヴァーラ(代用アヌスヴァーラ)は全て対応する鼻音に改めた。

また、上掲の二つのテキストには、『シュローカ』の詩節の順番に違いが見られるが、本稿は底本とする Schmidt のテキストにおける詩節番号に従った<sup>1</sup>。

以下の訳文における ( ) は訳者による補いである。

sūryaṃ dhyāyanti ye vai hutavaham anilaṃ bhūmim ākāśam ādyaṃ  
toyaṃ saṃpañcatatvaṃ tribhuvanasadanaṃ nyāsamantrais trisaṃdhyam |  
śrī hormajdaṃ sureśaṃ bahugūṇagarimāṇaṃ tam ekaṃ kṛpālūṃ  
gaurā dhīrāḥ suvīrā bahubalanilayās te vayaṃ pārasīkāḥ || 1 ||

夜明けと正午と日没の三つの時に、ニヤーイシュンというマントラ<sup>2</sup>によって、太陽と

<sup>1</sup> Bharucha 1933 のテキストでは、Schmidt 1963 における第 8～13 番目の詩節が 10、11、8、13、12、9 の順番となっている。

<sup>2</sup> Skr. nyāsamantra: nyāsa は AV. Niyāyiṣṇ の転訛と考えられる。ニヤーイシュンは『ホルダ・アヴェスター』に含まれる祈祷文のことで、それぞれ太陽、ミフル神、月、水(河川)、火に対する五

三界に住する火・風・地・虚空・水などの五元素を観想し、神々の主であり、多数の善性の故に尊崇に値する、唯一にして慈悲深き、聖なるかのホルマズド<sup>3</sup>を観想する者たち、そのような色明るく、賢く、勇敢で、多大な力を宿す者たちが、我々パーラシーカ（＝パールシー）である。

snāne dhyāne supāṭhe hutavahahavane prāśanotsargakāle  
śāstroktam maunamārgam nijaguruvihitam dhārayantīha ye vai |  
nānādhūpaiḥ supuṣpair varaphalanicayaiḥ pūjayantīha dhenum  
gaurā dhīrāḥ suvīrā bahubalanilayās te vyaṃ pārasīkāḥ || 2 ||

沐浴、瞑想、（聖典の）正しき朗唱、そして火への献供において、また食事と排泄の時において、シャーストラによって説かれ、我ら自身の祖師たちによって規定された沈黙の仕方を、この世において護持する者たち、様々な芳香や美しい花々や豊富な極上の果実によって、雌牛をこの世において供養する者たち、そのような色明るく、賢く、勇敢で、多大な力を宿す者たちが、我々パーラシーカである。

ramyaṃ svāṅge suvastram kavacagaṇamayam kañcukam ye dharanti  
yuktām ūrṇām sukuṣṭīm ahimukhasumitām bandhanam ca svakatyām |  
mūrdhānam citravastre paṭayugalatalaiś chādayantīha nityam  
gaurā dhīrāḥ suvīrā bahubalanilayās te vyaṃ pārasīkāḥ || 3 ||

自らの身に、着心地良く美しい衣服の、鎖帷子の性質を持った上着<sup>4</sup>をまとう者たち、そして、蛇の口に等しい、羊毛でできた結ばれた善きクスティー<sup>5</sup>を、自らの腰における帯（となす）者たち、この世において、一組の布でできた平らな（帽子）によって、色鮮やかな布に頭を常に覆い隠す者たち<sup>6</sup>、そのような色明るく、賢く、勇敢で、多大な力を宿す者たちが、我々パーラシーカである。

---

つのニヤーイションが存在する。

<sup>3</sup> Skr. hormajda: AV. Ahura Mazda のパフラヴィー語形からの転訛。即ち、ゾロアスター教における最高神アフラ・マズダーのこと。

<sup>4</sup> 英訳者たちの多くはパールシーが着るストレ（Sudreh）を指すものと解釈している。ストレは白い衣で、パールシーの子供は成人式においてストレとクスティーを身に付けることで、初めて共同体の一員と見なされる。

<sup>5</sup> Skr. sukustī: クスティーは、パールシーが身に付ける羊毛製の腰紐で、これを常に着用することはパールシーの宗教的義務の一つである。またクスティーは、①起床直後、②用を足す都度、③祈禱句を唱える前、④入浴時、⑤食事の前でのみ解かれ再び結ばれる（Modi 1922, pp.184-187）。

<sup>6</sup> 頭を帽子で覆うことはパールシーの宗教的義務とされ、また特にパールシーの聖職者は白い帽子を身に付けることが求められる（Modi 1922, p.152）。

yanmāngalyaṃ vivāhe tv atha śubhadivaseṣūtsavaṃ gītavādyam  
śrīkhaṇḍādyam sugandham vapuṣi yuvatayo dhārayantīha yeṣāṃ |  
ācārair yāḥ pavitrā bahugūṇavidhayo ramyaśāstrārthayuktāḥ  
gaurā dhīrāḥ suvīrā bahubalanilayās te vyaṃ pārasīkāḥ || 4 ||

婚姻に際して、彼らの祝宴を、さらに諸々の吉日においては、歌が歌われ楽器が奏でられる祝祭を(行うような者たち)、彼らの内の若き女たちは、芳香のある白檀などを、この世において身に付けており、彼女たちは諸々の行いによって汚れがなく、多くの美德ある振る舞いをなし、美しいシャーストラの教えに専心している。そのような色明るく、賢く、勇敢で、多大な力を宿す者たちが、我々パーラシーカである。

yeṣāṃ gehe suramyam madhurarasamayaṃ cānnadānam ca nityam  
kāsarān kūpavāpīr iha dharanītale dānam etat prakāram |  
vastrādyam dravyadānam dvijavaragūṇibhyaḥ sarvadā ye 'rpayanti  
gaurā dhīrāḥ suvīrā bahubalanilayās te vyaṃ pārasīkāḥ || 5 ||

彼らの住居において、非常に素晴らしい甘美な飲料(の施与)、そして食事の施与を常に行い、この地表では、諸々の溜め池や井戸や貯水池を(与えるという)このような施与を行い、衣服などの財産の施与を、バラモンの徳を持つ者たちにいつでも行う者たち、そのような色明るく、賢く、勇敢で、多大な力を宿す者たちが、我々パーラシーカである。

yādrg harṣo viśādaḥ sukham asukham aho jñānam ajñānam evam  
dharmādharmau ca yādrg viphalaphalakṛte āmayārogyake ca |  
ūrdhvādastāc ca yādrg dyutitimīracayau sṛṣṭisamhārakārau  
yeṣāṃ mārgē 'pi tadvad dvikam api vihitam te vyaṃ pārasīkāḥ || 6 ||

歓喜と同じ程、悲嘆があるように、同様に快樂と苦痛、賢知と無知があり、そして法と不法があるように、無益な行いと有益な行いがあり、そして病苦と息災があり、そして上方と下方があるように、光輝に属する集合と暗黒に属する集合があり、創造する者と破壊する者がいる。このような二種類が、振る舞いにおいても区別される者たちが、我々パーラシーカである。

gomūtram mantrapūtam hy atīsucinihitam triḥ pibet prāṇasuddhyai  
bāhyāntaḥsnānam uktam tadanu parivṛtā madhyaśe ca mudrā |

yāṃ tyaktvā naiva nidrā na ca japakaraṇaṃ devapūjādikāryaṃ

yeṣāṃ dharme hi tattvaṃ satatam abhayadaṃ gauradhīrā vayaṃ te || 7 ||

マントラによって清められこの上なく清浄な状態とされた牛尿<sup>7</sup>を、日に三度、氣息の浄化のために飲むべきである。それは外的かつ内的な沐浴と言われる。その後、身体の中央である腰の上に、特別な印<sup>8</sup>が巻かれる。その印を解いてからは、眠ることもなければ、また神々の供養のために低唱をなすこともない<sup>9</sup>。彼らの法（ダルマ）における真理が不安を与えるものでは決してないような、色明るく賢き者たちが、我々（パールシーカ）である。

kāṣṭhaiḥ ṣaṇmāsaśuṣkair agarumalayajaiḥ kāṣṭhakarpūradhūpaiḥ

homaḥ syāt paṃcakālaṃ pratidinam uditair akṣarair mantrayuktaiḥ

yatnair vahnim hy avanti tv atha ghananicaye no yugānte 'pi yāyāt |

satyanyāyaikaniṣṭhā na ca yuvatiratās te vayaṃ pārasīkāḥ || 8 ||

六か月間乾燥させられた沈香や白檀の諸々の木片によって、そして諸々の木片から出来た樟脳や香物によって、日に五回、毎日、マントラに相応しい朗唱された諸々の語を伴って、火への献供があるべきである<sup>10</sup>。彼らは熱心に火を世話し、更にまた、その火はユガ（時代）の終わりにおいてでさえ、靄の集積の中に行くことは決してない<sup>11</sup>。真なる正理のみに従っており、そして年若き乙女と交わることのない者たちが、我々パールシーカである。

yeṣāṃ evāṅganāyā ṛtusamayadine saptarātrād bhaved vai

śuddhiḥ śuddhāc ca māsāt prasavasamayake dehaśuddhis tathaiva |

ramyācāreṇa yuktā navakanakanibhā vīryavatyo baliṣṭhāḥ

pūtā hy atyantam etā vikasitavadanā gauradhīrāḥ suvīrāḥ || 9 ||

彼らの内の女性たちに関して、月経期間の日については七夜の後に、まさに清めがあるべきである<sup>12</sup>。そして、出産の時には、清めから一ヵ月後に、身体の清めが同じくあ

<sup>7</sup> Skr. gomūtra: ゴロアスター教において牛の尿（Gōmēz）は浄化作用を持つものとして様々な浄化儀礼において広範に利用されていたことが知られる。

<sup>8</sup> Skr. mudrā: ここでは即ちパールシーの腰紐クスティーのことを指す。

<sup>9</sup> クスティーを解くことについては、注5を参照。

<sup>10</sup> パールシーの習慣では聖火への香木の献供は、一日に五回行われる（Modi 1922, pp.230-232）。

<sup>11</sup> この文は恐らくは「この世の終わりにおいても、火が湿らされることはない」、つまり聖火が消されることは決してないという意味かと思われる。

<sup>12</sup> パールシーの伝統においては、月経中の女性は不浄な状態と考えられ、その期間は通常最短で三日、最長で九日とされた（Modi 1922, pp.171-173）。月経期間が終わった翌日、女性は適切な浄

るべきである<sup>13</sup>。彼らの内の女性たちは、喜ばしい振る舞いを備え、新しい黄金の如きであり、力強く、最も力がある。なぜなら、これらの女性たちは完全に清められており、破顔して、色明るく賢く、勇敢であるから。

veśyābhir naiva saṃgaḥ pitṛsamaguravaḥ śrāddhakāle 'gnicintā  
no māṃsaṃ yajñabāhyam svapīti na hi dharāyām aho puṣpanārī |  
vaivāhyā lagnaśuddhiḥ kvacid api na śucir bhartṛhīnā puramdhri  
yeṣāṃ ācāra evaṃ pratidinam uditas te vyaṃ pārasīkāḥ || 10 ||

娼婦らとの交わりは決してない。祖霊祭（シュラーツダ）の時には、父祖らの如き師たちが、火を気にかける。供犠の時を除いて肉はない。月経中の女性が大地の上で眠ることはない<sup>14</sup>。結婚式に関する星巡りの良い吉兆な時機がある。いかなる場合であっても、夫を失った妻は清らかでない。その行いが、毎日このように高尚である者たちが、我々パーラシーカである。

catvāriṃśad dināni pracarati na vadhūḥ pākakārye prasūtā  
maunādhyāśvalpanidrā jāpavidhiniratā snānasūryārcaneṣu |  
dhyāyante caiva nityaṃ marudanaladharātoyacandrārkaḥ  
yeṣāṃ varṇo na hīnaḥ satatam abhayadas te vyaṃ pārasīkāḥ || 11 ||

子供を産んだ女性は、四十日間、煮炊きに従事してはならない<sup>15</sup>。彼女は十分に沈黙し、睡眠は多くして、沐浴や太陽の称賛の際に、低唱することに専念する。また彼ら（パールシー）は、常に風と火と大地と水と月と太陽の崇拝を観想する。彼らの種姓は劣ったものではなく、不安を与えるものでは決してないような者たちが、我々パーラシーカである。

pānīyaṃ vyoma candraṃ hutavaham anilam bhūmim ādityam evaṃ  
śrīhormajdaṃ prabuddhaṃ hy avicalam amaram cetasā cintanīyam |  
nityaṃ yannāmapāṭhaṃ satatam abhayadaṃ dharmadaṃ ye smaranti  
āhāraṃ maunam ādyaṃ svatanuśucikaraṃ te vyaṃ pārasīkāḥ || 12 ||

---

化儀礼を受ける必要があった。

<sup>13</sup> 妊娠中の女性は不浄なものと接触することのないよう丁重に扱われるが、出産後の四十日間は他の人々から隔離され、四十日後沐浴によって清められる必要があった（Modi 1922, pp.5-7）。

<sup>14</sup> 注 12 参照。大地を始め、水や火は神聖なものとされ、不浄の存在と接触することは忌避された。

<sup>15</sup> パールシーの風習では出産後の女性は四十日間隔離された。注 13 も参照。

水と天と月と火と風と大地と太陽と、賢く不動にして不滅であり、心尽くして思念されるべき聖なるホルマズド神を想起し、そして、常に安全を保障し正法を与えるその名前を絶えず朗唱することを想起する者たち、(彼らにとって) 食事は沈黙して食べられるべきものであり、自身の身体の浄化が (なされる) ような者たちが、我々パーラシーカである。

ūrṇārūpām suvarṇām sulalitaphaladām jāhnavīsnānapuṇyām  
yoṣāṇām caiva puṃsām ghanaguṇaracitām hemavarṇām ca ramyām |  
nāgākārām viśālām gurujanavacanair mekhalām dhārayanti  
śāstroktām śronideśe hy urutarajaghane te vyaṃ pārasīkāḥ || 13 ||

羊毛から作られ、美しい色をしており、非常に喜ばしい果報をもたらし、ガンジス河での沐浴 (と同様) の功德を持ち、そして女性たちのものでもあり男性たちのものでもあり、束ねられた紐から作られ、金色で美しく、蛇のような形をして、幅広く、先師たちの諸々の言葉によって (語られ)、シャーストラによって説かれた紐帯<sup>16</sup>を、腰のより広くなっているところに身に着ける者たちが、我々パーラシーカである。

jātyā nityaṃ pavitrāḥ paśum api sahasā hanti cet pañcagavyaiḥ  
gomūtrasnānapūrvām ghanataradivasaiḥ śuddhir evaṃ manojñām |  
nityaṃ hy evaṃ gurūṇām suvacanakaraṇaṃ kalmaṣakṣālanārthe  
yeṣāṃ ācāra evaṃ pratidinam uditas te vyaṃ pārasīkāḥ || 14 ||

高貴な者たちは、パンチャガヴィヤ<sup>17</sup>によって、常に穢れなき状態とされる、たとえもし雄牛を思いがけず殺してしまったとしても。このような浄化が、さらに多くの日をかけて、牛尿への沐浴の前の心に適った (浄化を行う)。なぜなら、罪業を清めることに関する師たちの良き言葉の実行は常にこうしたものであるから。その行いが、毎日このように高尚である者たちが、我々パーラシーカである。

pūrvācāryaprabaddhair viracitarucirair mokṣamārgapradātā  
saṃskārais tatkvīnām viracitavidhinā kathyate vyomadaś ca |  
sarveṣāṃ ca trayāṇām dahanavasumatībhāskarāṇām ca pūjā

<sup>16</sup> クスティーのこと。クスティーについては注5を参照。

<sup>17</sup> Skr. pañcagavya: パンチャガヴィヤは、牛から生み出される乳、ギー、凝乳、牛尿、牛糞の五つの混合物のことで、ヒンドゥー教の伝統においては、非常に優れた浄化作用を持つものとされる。

puṣpādyaiḥ sampradiṣṭāḥ pramuditamanasā te vyaṃ pārasīkāḥ || 15 ||

解脱の道を与える者は、先師たちに依拠することで形作られた諸々の輝きによって（解脱の道を与える者）であると、そして天を与える者は、それらの賢人たちの諸々の浄法（サンスカーラ）によって形作られた儀軌でもって（天を与える者）である、と言われる。そして、火と大地と太陽の三つ全てに対して供養が、花などによって喜びの心でもって示される。そのような者たちが、我々パールシーカである。

śrīhormajdeyamukhyaḥ sakalavijayakṛt putrapautreṣu vṛddhi-

dātā vaḥ pātu so 'yaṃ bahudhanasukhakṛd nāśayet pātakam ca |

ye yūyaṃ pārasīkāḥ satatavijayinaḥ śrījayaiśvaryavantaḥ

āgacchantu prakāmaṃ bahubalanilayāḥ prāpnuvantu pravṛddhim || 16 ||

神々の主である聖なるホルマズド神、完全なる勝利をなす者であり、子々孫々に繁栄を与える者である、かの御方がお前たちを庇護しますように。そして多くの富と幸福をもたらすこの御方が、罪を滅しますように。常なる勝利を有し、聖なる勝利を支配するパールシーカなるお前たちは望みのままに行くがよい。多大な力を宿す者たちが、大いに繁栄を享受しますように。

## 2. 解説

### 2. 1. 『十六のシュローカ』について

『十六のシュローカ』とは、パールシーに伝承されたサンスクリット語で書かれた詩作品である。その名の通り、全部で十六の詩節から構成されるが、用いられている韻律は Śloka ではなく、Sragdharā である<sup>18</sup>。

パールシーの伝承によれば、この詩はムスリムからの迫害を逃れて西北インドにやって来たパールシーたちが、現地のヒンドゥー教徒の王ジャーディ・ラーナ (Jādi Rāṇa<sup>19</sup>) に対して自分たちの宗教の教義や習俗を説明するために作ったとされる<sup>20</sup>。また、同じくパールシーの伝統的な理解によれば、『十六のシュローカ』の第一から第十五詩節までが王に対するパールシーの宗教の説明であり、最後の第十六詩節は、それ

<sup>18</sup> Sragdharā は、一詩節が各二十一音節の四つの Pāda からなる韻律で、一つの Pāda の各音節の長短は、長長長 | 長短長 | 長短短 | 短短短 | 短長長 | 短長長 | 短長長である。

<sup>19</sup> *Qeṣṣe-ye Sanjān* において、パールシーのインド到来の時期に彼らの上陸地であるサンジャーンを支配していたとされるヒンドゥー教徒の王。この王名は *Qeṣṣe-ye Sanjān* のみから知られ、他の資料における比定先は確定していない。

<sup>20</sup> Bharucha 1906, p.ii および Hodiwala 1918, p.70、岡田 1997, p.183

を聞いた王からパールシーに対する返答である。こうした伝承を別にしても、事実、『十六のシュローカ』の内容にはパールシーの教えや習俗とよく一致する記述が見出され、また、全部で十六ある詩節の多くは「～という者たちが、我々パーラシーカ(=パールシー)である」という定型句で締めくくられている。少なくとも、この詩の作者の意図がパールシーの宗教や習俗の説明であったことは疑い得ない。

しかしながら、上記の伝承の信憑性については今日の研究者たちから疑義が呈されている。まず第一に、伝承によれば、本詩はパールシーのインド到来(10世紀)に際して成立したとされるが、後述のように、書写年代の判明している現存写本は17世紀末のもの(U<sub>1</sub>)が最古であり、10世紀に本詩が成立していたことを示す証拠は写本上には存在しない。また、同じ伝承は本詩をネールヨーサング・ダーヴァル(Nēryōsang Dhaval<sup>21</sup>)に帰しているが、写本のコロフォンで確認される著者名はĀkā Adhyāruである。また、今日の研究ではネールヨーサングは11-14世紀のどこかの時期に活動したと考えられており、インド到来以後の人物とされる<sup>22</sup>。

また第二に、『シュローカ』の内容は、その多くがパールシーの教えや習俗と一致することは確かであるが、他方で非ゾロアスター教的とも言える記述もまた散見される。特に、第三詩節および第十三詩節において、ゾロアスター教の聖紐クスティーが蛇に譬えて説明されているが、蛇はゾロアスター教において悪しき被造物の代表例とされており、清浄さや善性を象徴するクスティーとは相容れないものであるため、この説明は多分に非ゾロアスター教的である。むしろ、蛇に対する肯定的な態度は、ヒンドゥー教における蛇崇拝を想起させる。加えて、同じ第十三詩節では、クスティーの功德とガンジス河での沐浴の功德が並置され、また第十四詩節においては、清浄性の回復手段としてパンチャガヴィヤが言及されており、これらは『シュローカ』の作者のヒンドゥー教的傾向を窺わせる。後節において詳述するように、以上の点から『シュローカ』の作者についてはヒンドゥー教徒説が有力となっている。

## 2. 2. 『十六のシュローカ』の写本状況および校訂テキストについて

本詩はまずサンスクリット語で書かれ、その後グジャラート語に翻訳された。後述のように、現存する写本のいくつかは、そうしたグジャラート語訳が備わっている。

<sup>21</sup> ネールヨーサング・ダーヴァル(ダヴァルの息子ネールヨーサング)は、パールシーのサンスクリット学者。「ヤスナ」を含む『アヴェスター』の一部やパフラヴィー語ゾロアスター教文献をサンスクリット語に翻訳した人物で、現存するサンスクリット語訳ゾロアスター教文献の多くは彼の翻訳であることが知られる。

<sup>22</sup> ネールヨーサングの活動年代については、11世紀から15世紀の間で研究者たちの意見が分かれており確定していない(Hasan 2012, p.1 および Goldman 2018, pp.3-5)。



また、その中にはサンスクリット語で書かれた注釈を伴う写本 (H<sub>3</sub>) も存在する。

なお、以下の『シュローカ』の写本に関する情報は、Bharucha 1906、Bharucha 1933 および Schmidt 1963 に基づく<sup>23</sup>。

- ①U<sub>1</sub> : これは Ervad Maneckji Rustomji Unwala のコレクションに由来する写本で、『十六のシュローカ』の最初の二つの詩節のみを含む。なお、U という siglum は Schmidt が用いているもので、Bharucha は EMU という siglum を用いている (U<sub>11</sub> 以下も同じ)。テキストはフォリオ 120 と 121 の間に置かれた番号付けのなされていないフォリオに書かれている。写本全体の最後のコロフォンに基づく書写年代は、ヴィクラマ暦 1750 年 (=1693 年) の第 1 月の第 12 日であるが、『シュローカ』を書写した人物と奥付を記した人物が同一であるかは不明であるため、『シュローカ』の書写年代としては確実ではない。
- ②U<sub>11</sub> : これも U<sub>1</sub> と同じく Ervad Maneckji Rustomji Unwala のコレクションに由来する写本で、十六の詩節の全てを含んでいる<sup>24</sup>。テキストは、グジャラート語と共にフォリオ 127-139 に書かれている。写本の書写年代は記されていない。
- ③U<sub>21</sub> : これも上記二つの写本と同じコレクションに由来する写本で、グジャラート語訳と共に十六の詩節全てを含んでいる。U<sub>21</sub> のコロフォンによれば、『シュローカ』の著者の名前は Āko Adhyāra であり、翻訳者の名前は Dastūr Mānakjī Dastūrān Dastūr Sāheb Nośervānjī Sohrābjī である<sup>25</sup>。またコロフォンから知られる書写年代は、ヴィクラマ暦 1880 年、サカ暦 1745 年 (=1823 年) の第 6 月の第 8 日である。
- ④U<sub>22</sub> : これも同じコレクションに由来する。グジャラート訳などを伴わずに『十六のシュローカ』のみが三つのフォリオに書かれている。コロフォンや書写年代の記述はない。
- ⑤H<sub>3</sub> : これは恐らく Hoshang Jamasp のコレクションに由来する写本からのコピーで、サンスクリット語で書かれた注釈と共に十六の詩節全てを含んでいる。コロフォンによれば、コピー元となった写本はヴィクラマ暦 1823 年、サカ暦 1689 年 (=1766 年) に Dastūr Jamśedjī Jāmāspjī Āśājī Pharedūnjī が書写した写本で、この写本のコピ

<sup>23</sup> Bharucha 1906, pp.vi-xxii; Bharucha 1933, p.iii; Schmidt 1963, pp.159-162

<sup>24</sup> U<sub>11</sub> は続く U<sub>12</sub> と合わせて二分冊とされた一つの写本を形成する (Bharucha 1906, pp.xvii-xix)。テキスト校合に際して Bharucha 自身も Schmidt も特に言及していないが、U<sub>12</sub> のフォリオ 276-277 には『シュローカ』の最初の二つ (著者名は Ākā Dhāru) が書かれている (Bharucha 1906, p.xix.)。なお、U<sub>11</sub> は Bharucha の異読一覧において全く言及されない写本であることが Schmidt により指摘される (Schmidt 1963, p.160)。

<sup>25</sup> Bharucha 1933, p.iii : idam āko adhyārasya ṣoḍaśa śloka samāptā likhitam dastūr mānakjī dastūrām dastūr sāheb nośervānjī sohrābjī tasyārtham samāpta sampūrṇalikhivāt

一がなされたのは 1887 年 1 月 30 日である。このコロフォンに現れる『シュローカ』の著者名は Ākā Adhyāru である。また標目 (heading) には Śivarāma という注釈者の名前が現れる。

- ⑥PS (=Pārsī Smṛti) : これは、Bharucha が記すところによれば、グジャラート州バーオナガル市 (Bhavnagar) において Kumḍlā Pāṭhśālā のシャーストリである Prāṇśaṅkar Vīthālji Bhaṭṭ の邸宅から発見された写本だという。この写本は B. E. Entee によって、1919 年 9 月 18 日に J. J. Mody へ送られ、Hodivala および Bharucha は、この Mody からこの PS 写本を校合のために借りている。Hodivala は、PS は古く重要な写本であるとするが、具体的な書写年代は明らかにしていない<sup>26</sup>。また Schmidt は、自身には典拠不明としながらも、J. C. Katrak からの教示として、PS が 1693 年に書かれたとの見解を記している<sup>27</sup>。
- ⑦M (=Munich) : これはミュンヘン市の州立図書館所蔵の写本 M49 で、フォリオ 246r-234v にかけて、グジャラート語訳と共に十六の詩節全てが書かれている。内容としては U<sub>21</sub> と同じである。第一詩節のみはグジャラーティー文字で、残りの詩節はナーガリー文字で書かれている。写本に現れる著者名は Ākā Dhāra である。コロフォンから知られる写本の書写年代は、ヤズデギルド暦 1157 年 (=1789 年) の第 5 月の第 21 日である。
- ⑧K (=Kamdinji) : これは写本そのものではなく、1826 年に Dastur Aśpaṁdiarji Kamdinji が自身の著書において公表した『十六のシュローカ』のサンスクリット語テキストのことである<sup>28</sup>。Kamdinji のテキストは、印刷された『シュローカ』のテキストとしては最初のもので、テキストはグジャラート語訳と共に、グジャラーティー文字で書かれている。Schmidt によれば、K の読みは PS もしくはこれに連なる写本に基づくものだが、いくつかの読みにおいて PS より優れた読みを有しており、また後述の CV に属する写本も参照していることが確認されるという<sup>29</sup>。さらに K には、単なる誤読や書き損じの結果とは思えない、他のどの写本にも確認されない読みがいくつか見出されるという。これらの点から、Schmidt は K に写本と同じ価値を認め、他の写本と同様に扱っている<sup>30</sup>。

<sup>26</sup> Hodivala 1920, p.67 n. および Schmidt 1963, p.160 を参照。Schmidt が確認した限りでは PS の実際の書写年代は全く公表されていないという。但し、彼も PS が現存する他の写本より古い (少なくとも古い読みを持つ) という点については同意している (Schmidt 1963, pp.162f.)。

<sup>27</sup> Schmidt 1963, p.160

<sup>28</sup> Kamdinjee, Uspundiarjee, *Historical Account of the Ancient Leap Year of the Parsees* (Surat : 1826). (cf. Schmidt 1963, p.158)

<sup>29</sup> Schmidt 1963, pp.165-167

<sup>30</sup> なお、K という siglum はゾロアスター教研究関連でしばしばコペンハーゲン・コレクションを

⑨Mf 67 (111) : これはボンベイ市の Mulla Firoz Library 所蔵の写本コレクションに含まれるもので、その pp.111-149 において、『十六のシュローカ』がグジャラート語訳と共にグジャラーティー文字で書かれている。この写本のテキストとグジャラート語訳は、書き間違いを除いて上述の K と一致しており、K からのコピーであるとされる<sup>31</sup>。

この写本の冒頭と末尾には、『シュローカ』の著者名として Ākā Dāru が現れる。同じ書写者の手によると思われる写本の別の箇所からは、書写年代としてヤズデギルド暦 1209 年、ヴィク라마暦 1896 年、サカ暦 1761 年 (=1840 年) という日付が確認され、『シュローカ』もこれとほぼ同時期に書き写されたものと考えられる。

⑩Mf 111 (482) : これも上記と同じ写本コレクションに含まれるもので、フォリオ 449-465 において『十六のシュローカ』がグジャラート語訳と共にグジャラーティー文字で書かれている。内容は U<sub>21</sub> および M と同じものである。書写年代は記されていない。Schmidt 1963 において Mf という siglum が指すのは基本的にはこちらである。以上が従来校訂において用いられた写本である<sup>32</sup>。

これらの各写本間の関係は明確ではない。一見して同じ写本系統に連なるのは U<sub>21</sub>、M、Mf で、この三つは完全に同一なわけではないが、共通するテキストおよびグジャラート語訳を有している。また U<sub>1</sub> と H<sub>3</sub> もまた基本的にはこの三つと同じ写本グループに属するとされる。U<sub>22</sub> は他には見られない多くの独自の読みを有しているものの、そのいくつかは他の写本との混交 (Corruption) の結果であり、またいくつかは書写者らによる意図的な改変の結果であるとされる。

以上から、Schmidt はこれらの諸写本 (U<sub>21</sub>、M、Mf、U<sub>1</sub>、H<sub>3</sub>) を便宜的に CV (= Common Version) として区別し、ひとまとめにしている<sup>33</sup>。そして、U<sub>22</sub> はこの CV から派生した写本とする。この CV に連なる各写本の関係や、CV と U<sub>22</sub> との関係は明らかではない。U<sub>22</sub> は U<sub>21</sub> のみ、もしくは M のみと類似する異読を持つが、U<sub>22</sub> と U<sub>21</sub> あるいは M の間に見られるそうした類似は、それらの写本が互いに関連していたために生じたものではなく、CV の祖本から各々の写本が書写された際に行われたと推測される、韻律の回復を目的としたテキストの改変の結果生じたものとも考えられる。従って、U<sub>22</sub> と U<sub>21</sub> ないし M の間の類似は互いに無関係の可能性があり、Schmidt は U<sub>22</sub> が他の CV の諸写本よりも U<sub>21</sub> と M と近い関係にあることを示す証拠は不十

---

指すのに使われるが、ここでは無関係である。

<sup>31</sup> このため Schmidt はこの写本を校合対象から除いている (Schmidt 1963, p.161)。

<sup>32</sup> この他、本稿では割愛したが、Schmidt は利用が不可能であった『十六のシュローカ』の写本 (および刊本) についても記している (Schmidt 1963, pp.161f.)。

<sup>33</sup> Schmidt 1963, p.163

分であるとしている<sup>34</sup>。

CV から独立しているのが PS で、基本的には PS を参照している K がこれに連なる。PS は、『十六のシュローカ』の詩節番号の順番が CV と異なっている<sup>35</sup>のに加え、Schmidt によれば PS の読みは事実上全ての場合において、他の諸写本の異読よりも優れているとされ、また韻律 (Sragdharā) が乱れていないのは PS のみだという<sup>36</sup>。このため PS は CV に属する写本よりも古い、あるいは少なくとも古い読みを保存していると考えられる。

Schmidt は、PS 以外の写本の異読は何らかの注解 (Gloss) か、あるいは現存しないサンスクリット語で書かれた注釈に由来するものとして説明可能としており、『シュローカ』のテキストは、恐らくはテキスト本文とそうした注釈が明確に区別されない形で伝承されたために、後になって注釈から本文を切り離す際に、テキスト本文が不完全に再構成されることになったのではないかとしている。さらに、この再構成の際に、当時のパールシーの信仰と一致しないような記述が、別のより自然な表現へ改変されたと推測しており、そうした改変の痕跡が窺える例として、第二詩節における雌牛の崇拜 (U<sub>1</sub>) に対する火の崇拜 (U<sub>21</sub>, Mf, H<sub>3</sub>) という異読や、また第三詩節におけるクステイーの描写中の「蛇: ahi」という単語 (M) に対する「柔らかい: mṛdu」という異読の存在を挙げている。

以上から、『十六のシュローカ』の現存写本の間をまとめれば、まず大きなグループとして CV そして PS の二つが存在し、CV には U<sub>21</sub>, M, Mf, U<sub>1</sub>, H<sub>3</sub> (また恐らくは U<sub>11</sub> も) が含まれ、また具体的な関係性は不明だが U<sub>22</sub> は CV の写本からの派生である。CV に属する各写本は恐らくは一つの共通の祖本 (Proto-CV) に遡るが、そこから書写される過程でテキストの改変を経ており、その結果として CV の各写本の異読が生じている。これに対して PS は CV よりも古い読みを保っており、(即ち CV において行われた祖本のテキストの改変を経ておらず)、CV よりも古い写本であると考えられる。また K は PS と大部においては一致するものの、CV やあるいは CV や PS とも違う未知の写本も参照していると考えられ、結果として K に独自の読みを有している。

さて、以上の写本の内、複数を利用した『シュローカ』の校訂テキストとしては、

---

<sup>34</sup> Schmidt 1963, pp.163f.

<sup>35</sup> なお本稿で底本とした Schmidt 1963 のテキストの詩節番号はこの PS に基づいている (古いと思われる写本の順番)。Hodiwala 1918 のテキストも同様である。これに対して Bharucha 1933 のテキストは、CV での順番 (多数派の写本の順番) に従っている。二つの順番の相違については注 1 を参照。

<sup>36</sup> Schmidt 1963, p.162 および n.6

次の三つが知られている。最初に公表された校訂テキストは、Shapurji Kavasji Hodivala<sup>37</sup>のテキスト(Hodivala 1918)である。Hodivalaは校訂に際して、Ervad Maneckji Rustomji Unwalaからの写本(U<sub>1</sub>以下の写本のいずれか、もしくは全部)と、H<sub>3</sub>のコピー元の写本そしてPSを利用している<sup>38</sup>。彼のテキストは英訳とグジャラート語訳に加えH<sub>3</sub>のサンスクリット語注釈の英訳を備えた非常に有益なものであるが、残念なことに、異読に関する情報が少なく、また異読を与える場合も出典となる写本を明示していない。またSchmidtはHodivalaが行ったテキストの修正(emendation)は信頼のおけるものではないとし、これと上記の異読に関する取扱いから、Hodivalaのテキストは校訂テキストとして価値が薄いとされている<sup>39</sup>。

Hodivalaに続いて公表されたのが、Bharuchaの校訂テキスト(Bharucha 1933)で、これは写本に基づく異読一覧を備えており、Hodivalaのテキストより優れてはいるものの、Schmidtが指摘するように異読の提示やテキストの修正に関して多くの不備を残している。Bharuchaが校訂に際して利用したことを明言しているのは、U<sub>1</sub>、U<sub>11</sub>、U<sub>21</sub>、U<sub>22</sub>(但しU<sub>11</sub>は異読一覧に現れない)とH<sub>3</sub>そして特に言及されずに異読一覧の中に現れるだけであるがPSが利用されている。

このBharuchaの校訂テキストの不備を解消することを目的としたのがSchmidtの校訂テキスト(Schmidt 1963)であり、彼はBharuchaの利用出来た上記の写本に加えて、M、K、Mfを新たに自身の校訂のために利用している<sup>40</sup>。最新の校訂テキストであり最も多くの写本が利用されている校訂であること等から、本稿ではこのSchmidtのテキストを和訳の際の底本とした。

## 2. 3. 著者および成立年代を巡る問題

『十六のシュローカ』の著者および成立年代について確実なことはほとんど分かっていない。伝承における著者および成立年代の信憑性が低いことは冒頭で述べた通りで、著者についてはヒンドゥー教徒説が有力である。

写本から知られる著者の名前はĀkā Adhyāru (H<sub>3</sub>)、Āko Adhyāra (U<sub>21</sub>)、Ākā Dhāra (M)、Ākā Dāru (Mf)で、綴りに細かな違いが見られるものの、同一人物を指すことは明らかである<sup>41</sup>。Stausbergによれば「Adhyāru」という名前はインドのパールシーの

<sup>37</sup> Hodivala / Hodiwala とも綴られるが同一人物。

<sup>38</sup> Hodiwala 1918, p.70

<sup>39</sup> Schmidt 1963, p.159

<sup>40</sup> 但し、彼はいくつかの写本の異読については、写本自体を参照するのではなく Bharucha 1933 の異読一覧のみに依拠しているようである。

<sup>41</sup> 本稿では、Schmidt に倣い、Ākā Adhyāru を『十六のシュローカ』の著者名とした。

神官たちの間で一般的な名前であったという<sup>42</sup>。Schmidt もまた「Adhyāru」という名前がパールシー的な名前であるとしつつも、「Ākā」という名前はパールシーに一般的なものではないと述べている<sup>43</sup>。いずれにせよ、名前からだけでは彼がパールシーであったのかヒンドゥー教徒であったか決定することは難しい。

この Ākā Adhyāru がパールシーであったことが否定されるのは、パールシーの宗教の説明であるはずの『十六のシュローカ』に見られるヒンドゥー教的記述の故にである<sup>44</sup>。このため Schmidt を始めとして、『シュローカ』の著者についてヒンドゥー教徒説が主張されている。しかしその際に、特に問題となるのは、ヒンドゥー教徒によって作詩され、ヒンドゥー教的、ひいては非パールシー的記述を有するにも関わらず、何故この『十六のシュローカ』がパールシーの間で伝承され、また彼らのインド移住の伝承と結び付けられる程に権威を持ったのかという点である。

この点について Schmidt は、既に『シュローカ』の詩作に先んじて、口伝としてパールシーたちの間に広まっていた伝承があり、これを書き残す必要性を感じたパールシーの神官が、ヒンドゥー教徒である Ākā Adhyāru にサンスクリット語で文書化するよう依頼したとの仮説を立てている<sup>45</sup>。彼に従えば、『シュローカ』はパールシーの要望で詩作されたものであり、そこに含まれる非パールシー的記述は、ヒンドゥー教徒が作者であったため生じた、パールシー側にとっては不本意なものであったことになる。彼の説の根拠の一つは、実際に『シュローカ』の諸写本から非パールシー的と思わしき箇所が訂正された痕跡の窺えることである。一方で、Schmidt と同様にヒンドゥー教徒説を主張する Eduljee は、ヒンドゥー教徒の Ākā Adhyāru は、何らかの理由で他のヒンドゥー教徒の同朋たちにパールシーの宗教を説明することを意図して、この『シュローカ』を書いたと推測している<sup>46</sup>。ただ Eduljee の説は、Adhyāru がパールシーの宗教を説明する必要を感じた具体的な理由を述べておらず、また、何故そのようにして成立した『シュローカ』がパールシーの伝統に取り込まれたのかを十分には説明していない。また著者に関する新説を提示したわけではないが、Stausberg は議論の視野を広げるためのあくまでも一つの可能性として、『十六のシュローカ』がパールシーとは

---

<sup>42</sup> Stausberg 2002, p.393

<sup>43</sup> Schmidt 1963, p.192

<sup>44</sup> なお、ヒンドゥー教徒の王に対する便宜のために、ヒンドゥー教的な説明をしたとする解釈は次の事実から否定される。ゾロアスター教的に相容れない、蛇の譬えを用いたクスティの説明。神を意味する訳語として Skr. deva を用いていること（ネールヨーサングのサンスクリット語訳では deva と同語根のイラン語が「悪魔」の意であるため、deva の語は用いられない）。

<sup>45</sup> Schmidt 1963, p.194

<sup>46</sup> Stausberg 2002, p.397 および n.397、なお、Stausberg によれば Eduljee は Schmidt 1963 の存在を知らなかった。

別のイラン系のゾロアスター教の伝統に由来するのではないか、あるいは『バヴィシユヤ・プラーナ (*Bhaviṣya-Purāna*)』に現れるイラン系宗教者ボージャカ (Skr. Bhojaka) の宗教と関連しているのではないかと述べている<sup>47</sup>。

『シュローカ』の成立年代については、まず、現存写本の中では U<sub>1</sub> (および PS 写本) の書写年代である 17 世紀末 (1693 年) が最古であることが知られる。しかし、この年代特定の根拠は薄弱であり、この他に書写年代が知られる写本として、H<sub>3</sub> (1766 年)、M (1789 年)、U<sub>21</sub> (1823 年)、Mf (1840 年) が続く。従って、写本から確認される限りでは、『シュローカ』の成立は 17 世紀末以前とまでしか言えない。ただし、保存する読みの古さに基づき PS は CV (=U<sub>1</sub>) に先行するとする Schmidt の推測に従えば、『シュローカ』の成立は 17 世紀末よりも更に大きく早められることになる。

成立問題に関する内的証拠に基づく議論としては、1599 年にパールシーの Bahman Kaikobad Sanjana によって書かれた『サンジャーン物語 (*Qeṣṣe-ye Sanjān*)』の中に『十六のシュローカ』と並行する記述が存在し、後者から前者への影響が窺えるとの説があり、これに従えば、『シュローカ』の年代は 16 世紀以前と、一世紀ほど早められることになる。しかし、両者が「パールシーのインド移住に関する共通の伝承」を背景として成立したことは認められるものの、少なくとも直接的な影響関係については現在否定されている<sup>48</sup>。Schmidt は現存の資料からは『シュローカ』の成立年代を決定することは最早できないとしつつも、『シュローカ』と *Qeṣṣe-ye Sanjān* について、『シュローカ』の成立自体は *Qeṣṣe-ye Sanjān* の成立に先行する可能性は高いとしている<sup>49</sup>。いずれにせよ、本詩作品の成立年代については、17 世紀以前のいずれかという以上のことは確定されていない。しかし、この詩作品が少なくとも 17~18 世紀にかけてパールシーの間に広まり、これ以降今日まで伝承されるようになったことは確実である。

#### 2. 4. 資料としての『十六のシュローカ』の意義

ここまで述べてきたように、本詩の成立背景についてはほとんど不明と言って良い。少なくとも著者がパールシーではない可能性の高いことが窺えるのみである。Schmidt は彼の議論の最後において、『十六のシュローカ』が偽作の産物であるという疑いを抑えることは出来ない」と述べている<sup>50</sup>。少なくとも『十六のシュローカ』をパールシーの宗教に関する資料として扱うことは非常に困難であり、注意を要すると言えよう。

<sup>47</sup> Stausberg 2002, pp.397f.

<sup>48</sup> Schmidt 1963, pp.188-196 および Stausberg 2002, p.393

<sup>49</sup> Schmidt 1963, p.196

<sup>50</sup> “On the whole, the suspicion cannot be suppressed that the Sixteen Ślokas are a spurious product and cannot be considered as authentic.” (Schmidt 1963, p.196)

しかし、その内容にパールシーの教えと並んでヒンドゥー教的要素が散見されることや、そうした作品がパールシーの間で伝承されたこと、またこの詩がそもそもサンスクリット語で書かれたという事実は、パールシーとインド宗教との交流の一端を明らかにするものとして注目されるだろう。

また、これと並んで注目されるのは、本詩とボージャカの宗教との関係である。「ボージャカ」とはプラーナ文献の一つ『バヴィシュヤ・プラーナ』に現れる太陽崇拜集団で、彼らについては、イラン系の出自（あるいはイラン系宗教からの影響）を持つことが知られている。彼らの宗教と『十六のシュローカ』の内容との類似性については、既に先行研究において注目されており<sup>51</sup>、例えば、『シュローカ』の第一、第十一、第十二および第十五詩節においては太陽が崇拜対象とされていること、また、第三および第十三詩節におけるクステイーに対する蛇の譬えに類似する、ボージャカの聖紐と蛇を結びつける記述が、『バヴィシュヤ・プラーナ』に見出されること<sup>52</sup>が指摘される。しかし、ボージャカの宗教（および『バヴィシュヤ・プラーナ』）と『十六のシュローカ』そしてパールシーの宗教という三者の関係については、単なる指摘に留まっており、詳細な検討は未だなされていない。

一方で、当然ながら『シュローカ』の記述とボージャカには違いも見出され、ボージャカと『シュローカ』の関連を調べる上では、そうした相違にも気を配る必要があるだろう。上の類似に関連する限りであれば、ボージャカの聖紐はアヴィヤンガ (Skr. *avyaṅga*<sup>53</sup>) と呼ばれるが、『シュローカ』が用いているのはクステイー (Skr. *kustī*) というパールシーの用語であることや、また、『シュローカ』では太陽のみならずアフラ・マズダーも崇拜対象として現れる（第一および第十六詩節）が、『バヴィシュヤ・プラーナ』には明示的にアフラ・マズダーやそれに類する名前に言及する記述は見られないことなどが指摘できる。

こうした違いは、ボージャカが『シュローカ』の作者であったというのではなく、むしろ『シュローカ』の作者がボージャカについて『バヴィシュヤ・プラーナ』の記述を通じて知っていたことを示している。上述の Schmidt の『シュローカ』の成立背景に関する仮説に従うならば、パールシーの口承を書き記すことを依頼された *Ākā Adhyāru* はパールシーと『バヴィシュヤ・プラーナ』のボージャカに類似を認め、詩

---

<sup>51</sup> Hodivala 1920, pp.vi-vii (但し、この記述は Hodivala の著作に対する M. P. Khareghat による序文中である)、また Stausberg 2002, pp.397f.

<sup>52</sup> *Bhaviṣya-Purāna* I, 142, 2-16: ここではボージャカの聖紐をまとう風習が蛇王 *Vāsuki* に由来することや、聖紐の *Avyāṅga* という名前が「蛇の身体 (*aher āṅga*)」に由来することが語られる。

<sup>53</sup> なおこの語 (*Avyāṅga*) 自体は、聖紐を表す *AV. aiḥiāṅhana* の転訛と考えられている。



作に際してプラーナ文献からの知識も利用した、とみるのが妥当と言えよう。『シュローカ』とボージャカの関係について、より詳細な検討が待たれる。

いずれにせよ、『十六のシュローカ』はパールシーの宗教思想に関する資料としては扱い難いが、パールシーとヒンドゥー教の交流に関する資料として大きな価値を持つ。また、ボージャカの宗教に関わる資料としても注目され、とりわけボージャカに関する資料は『バヴィシュヤ・プラーナ』を除けば非常に限られているため、『十六のシュローカ』を資料として活用できるならば、その『シュローカ』の情報はボージャカ研究において大きな意義を有すると言える。

#### 参考文献（本稿で引用した文献のみ）

- Bharucha, Ervad Sheriarji Dadabhai (ed.), *Collected Sanskrit Writings of the Parsis Part I* (Bombay : Nirvana Sāgara Press, 1906).
- Bharucha, Ervad Sheriarji Dadabhai (ed.), *Collected Sanskrit Writings of the Parsis Part VI* (Bombay : Nirvana Sāgara Press, 1933).
- Goldman, Leon, *The Sanskrit Yasna Manuscript S<sub>1</sub> (Handbook of Oriental Studies vol.32/1)* (Leiden, Boston : Brill, 2018).
- Hasan, Reza Baghvidi, “Parsi Sanskrit”, *Indic across the Millennia: From the Rigveda to Modern Indo-Aryan (14<sup>th</sup> World Sanskrit Conference, Kyoto, Japan, September 1<sup>st</sup>-5<sup>th</sup>, 2009, Proceedings of the Linguistic Section)* (2012): 1-8.
- Hodiwala, Shapurji Kavasji, “The Sixteen Sanskrit Shlokas recited before King Jadi Rana”, *The Dastur Hoshang Memorial Volume* (1918): 70-94.
- Hodivala, Shapurji Kavasji, *Parsis of Ancient India (Dorab Saklatwalla Memorial Series II)* (Bombay : Sanj Vartaman Press, 1920).
- Modi, Jivanji Jamshedji, *The Religious Ceremonies and Customs of the Parsees* (Bombay : British India Press, 1922).
- Schmidt, Hans-Peter, “The Sixteen Sanskrit Ślokas of Ākā Adhyāru”, *Bulletin of the Deccan College Post-Graduate and Research Institute vol.21* (1963): 157-196.
- Stausberg, Michael, *Die Religion Zarathushtras Band 1* (Stuttgart : Verlag W. Kohlhammer, 2002).
- 岡田明憲（1997）「梵語訳 Avesta の意義」, 『オリエント』40 卷 1 号, 183-187, 日本オリエント学会.